
東方死神滞在記

銀月兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方死神滞在記

【Nコード】

N9197K

【作者名】

銀月兎

【あらすじ】

とある理由で外界の死神が幻想郷に舞い降り、幻想郷の某死神氏よりはちゃんと働いていると山田さんが証言するほどの人物（？）が活躍する幻想郷死神滞在記

東方死神滞在記第一話「…死神だってサボりたいと思う時あるんだよ、だから

(訂正) いっその事改ページをなくしてみた

東方死神滞在記第一話「死神だってサボりたいと思う時あるんだよ、だから

…突然だが人々は死神という存在がいるということを信じるだろうか？またその死神が現代の社会人のように働いているのを知っているだろうか？

「…知る訳がないよな」

…黒髪の青年はダルそうに呟く。彼の名は天崎奏^{アマサキカナデ}県内で名門の高校に通う優等生であるがそれは只の表の姿であり…裏は先程彼が呟いたとおり死神である。

「そうだよ、一般人が知る訳がない」

奏は溜め息をつきながら言った。そもそも死神は基本夜にしか働かず、昼間は動くことは滅多にないのだ。たまに昼間に動くとしても一般人には見えない視認障害の結果を張って作業を隠している…つまり死神という存在が知られるはずがない。「だからといって黙ってやってられる程、俺は大人じゃないよ。本当愚痴こぼさなきゃやってられないな」

奏は再び溜め息をつくと手に持っていた飲みかけのジュースを一気に飲んで、空になった缶を遠くにあったゴミ箱めがけて投げた。するとそれは綺麗な放物線を描いて入った。それを見て奏の身体は固まった。

「…ヤバい、何がヤバいつてあんなに綺麗に入ったのは不味すぎる…例えるならお笑い芸人がすべりすぎて空気が冷めた時ぐらいだ。てか俺があんなに綺麗に入れた時は大抵口くなこと起きてないぞ」
奏は冷や汗を流し、嫌な予感を感じながらも学校の予鈴のチャイムが鳴ったので急いで屋上から出ていった。「よし、本日の授業は終了だ」

奏は大きく伸びをしていると一人の男子生徒が近づいて来た。

「よお、奏。今日空いてるか？」

「ん？悠也か…空いてるけど、どうした？」

奏に話しかけてきた男子生徒は奏の小学時代からの親友の桐島悠也^{キリシマユウヤ}だった。奏は一応死神の仕事はメールで伝達されるので、ないかを確認すると悠也にOKの返事を出した。それに悠也はそうかと笑うと自分の後ろを指差し、奏も悠也の後ろを見ると二人の男女がいることに気付いた。

「会うのは初めてだよな？紹介するが、男が亮で女の方が千秋だ」
悠也が言う二人が前に出てきた。

「うーす、俺は山下亮だ。^{ヤマシタリョウ}よろしく頼むぜ…まあ、悠也とは幼なじみでよく遊んでたんだよ」

「私は静原千秋。^{シズハラチアキ}そうね、その亮と同じく悠也とは長い付き合いだからよろしく」

「俺は悠也の親友の天崎奏だ。よろしく頼むぞ？」

三人が握手していると悠也がパンパンと手を叩いて注目させ、三人がそちらに向くと言った。

「とりあえず今日は亮の家に向かうつもりだったんだし、今から早速向かうか」

それに三人は頷くとすぐに全員学校から出た。しばらく徒歩で歩くと亮の家に着いた。

「…ところで亮の家で何するんだ？」

亮の家に向かう下校途中で二人と打ち解けた奏は名前で呼び合う仲になっていた。

「いや、何か亮が面白い本を手に入れたらしくてな」

「実は言つと、兄貴がオカルトとか好きで奇妙なもの手に入れて来たんだよ…まず表表紙が真っ黒なんだよ」

悠也が奏に答え、亮が続くように話をする。

「…表表紙が真っ黒ってデ。ノートみたいね？」

「だろ！？俺も気になったから読んでみたんだ。…そしたら見たこともない文字で意味分かんかったんだよ。」

「それ、読めないのに何で私たちを呼んだのよ？」

「まあ、もしかしたら読めるかもしれないだろ？」そう話す亮に千

秋は呆れていたが奏は少し目を細めて見ていた。

「（黒表紙に意味不明の文字ね）…嫌な予感がするな」

「…？どうした奏？」

「…何でもねえよ。ほら、早く入ろうぜ。」

様子がおかしい奏に悠也はたずねたが、奏は首を横に振ると悠也に入るようにうながし、全員が亮の家に入って行った。

亮の部屋は高校生の男子にしては綺麗な方だった。亮がその本を持ってくるのに時間がかかるそうで三人は用意された紅茶を飲んで話していたが、しばらくすると亮が古めかしい黒い本を持ってきた。

「それが例の本か？」

悠也が亮に聞くと亮は頷いた。

「ああ、中身が全く意味不明な訳」

「…確かに分かんないわね」

亮が中身を見せても千秋も分からずに、頭を捻っている。「…魔術グリ書別名」

「！？」

そんな中奏がポツリと呟くと三人は驚いて奏を見る。奏はチラリと三人を見回すと溜め息をついた。三人を代表して悠也が奏に質問する。

「奏、お前コレが読めるのか？」「…読める。てか、お前も読めるはずだぜ？餓鬼の頃、未熟だったとはいえ俺の視認障害の結界を破ったしな」

悠也の質問に呆れながら奏は返すと、力を抜いて身体を壁に預けた。そんな奏に亮と千秋は混乱する。

「…あの…奏さん、結界って何でせうか？」

「それに、その…グリモワールだっけ？それと言い、何で悠也が読めるのよ？」

奏はチラリと悠也を見ると彼も聞きたそうに見ていたので溜め息を再びついた。

「（何か幸せが逃げていく気がする）…混乱するかもしれんが、俺

「は死神だ。」

『は？』

三人が三人とも全く同じ反応をするが、気にせずに奏は続ける。

「つまり死神という存在の俺は本来の姿をバレないようにするため
に視認障害の結界を張るわけだが、餓鬼の頃の悠也に破られた。結
界が一般人が破れるわけないし、魔力が漏れていたから魔法使いの
子孫ととりあえず断定したわけだ…本人は忘れていたがな」

「あの…」

「はい、次！」

千秋が質問しようとしたが気にせずに奏は続ける。

「次はグリモワールについてだな。これは基本魔法使いが記した本
でな、魔力があるやつしか読めない代物だ。…まあ、死神がいるく
らいだから魔法使いもいると認識してくれ、とりあえずこれで話の
一つは終わりだ。」「何が何だか分からん！」

「少しはまとめなさいよ。つまり、あなたは死神、悠也が魔法使い、
そしてこの本は魔法使いの本ってことでいいのよね？」

「（ほう、やるな千秋）ああ、その程度認識してくれば十分だ。」
亮が唸るなか千秋は呆れ顔で亮を見つつ奏に回答を返すと奏は少し
笑いながら頷いた。「…奏、いきなり魔法使いと言われても実感な
いんだけど…」

「そんなもんだし、分かりやすい証拠があるぜ？」

「何それ？」

悠也の質問に奏は口をつり上げると爆弾発言をしてやった。

「何、どうやら悠也の漏れた魔力を元に魔道書の異世界転移魔法が
作動したようだ。」『はああああ！？』皆が驚いている中、さらに
奏は言った。

「ところで今の心情からすればだな…死神の仕事サボりたいと思っ
た俺が悪いのかな？どう思うよ皆？」

『知るかあああああゝ！！！？』

奏は三人の叫びを最後に意識が飛ぶのを感じた。魔道書はしばらく

の間発光していたが、一瞬物凄い光が辺りを覆った後、そこに四人の姿と本はなかった。

東方死神滞在記第一話「…死神だってサボりたいと思う時あるんだよ、だから

正直文がガタガタになったかも（汗）

ただ、自分のパソコンで見るとひどかったですね

東方死神滞在記 キャラ設定（前書き）

キャラ設定です

東方死神滞在記 キャラ設定

「天崎奏」

外見は銀髪で真紅の眼をした女顔。髪は腰までかかっており、身体もかなり華奢のように見えるが筋肉は普通に怪力である。また人間の姿ではあるが死神なので身体は頑丈で毒などにも強い。ちなみに周りからの評価は普通は綺麗か、カッコいいだが、女装した場合は異常なほどに可愛いらしい…「桐島悠也」

奏の親友。奏いわく魔法使いの血を受け継いでいるらしいが、本人が自覚していなかったので現在一般人と似たようなものである。髪は肩ぐらいの髪で黒髪。そして黒眼、筋肉はほどよく引き締まっている。ちなみに魔法使いとしての才能はある。「山下亮」

悠也の幼なじみ。茶髪で焦げ茶色の眼、眼鏡をかけ髪型は短髪である。意外と身体は悠也よりも引き締まっている。剣道もやっており、その腕前は全国大会優勝の実力があるほど。「静原千秋」

身体は出るところは出て締まるべきところは締まっている年頃の女の子の中では理想的な身体。頭の回転が早く、大抵の状況には臨機応変に対応できる。容姿は青髪のツインテールに薄黄の眼。

東方死神滞在記 キャラ設定（後書き）

文の表現がおかしいところがあるかもしれませんが生暖かく見守ってくださいw

アドバイスなどをくれると嬉しいです。

東方死神滞在記二話「やっぱり同じ者同士だと世界が違っても話は通じ合うもん

二話目です。山d…映姫様登場！

東方死神滞在記二話「やっぱり同じ者同士だと世界が違っても話は通じ合うもん

「……………ん？此処は？」

奏が目覚まし辺りを見回すと…彼岸花？

「……………」

奏は目を擦り、再び辺りを見る。まず周りは彼岸花、そして奥に見えるのは…川と舟？

「…あり？えーっと、確かにあれは転移魔法の術式だったはずだな？まさか《三途の川》のはずが…ないよ、ないない！だって俺は…？」

奏は顔をひきつらせながら言っていると、肩を叩かれているのに気付き後ろを振り向いた。

「……………」

「…や！」

赤髪で鎌を持った女性が無言の奏に挨拶をしてきたが奏はポカンと口を開けていた。

「お姉さん」

「ん？」

「その鎌とお姉さんは…何？」

「…シ・ニ・ガ・ミ」

「……………」

「…」再び無言で見つめ合うが赤髪の女性の言葉を聞いてから先程よりも奏は冷や汗を流しまくっていた。

「い、」

「い？」

「嫌あああああ！？」赤髪の女性はよく聞き取れなかったがために奏に近付いた瞬間、いきなり奏が叫んだので女性は驚いて尻餅をついた。

「ちょ、あんた！？いきなり嘘だ！！」ひっ！？」

女性は文句を言おうとしたが奏がひぐ。しの某鈍少女の名言と顔で言ったため女性は悲鳴を上げた。奏は首を激しく横に振り髪を振り乱しながら叫ぶ。

「嘘だ！嘘だ！嘘だ！？何いきなり転移した瞬間死亡って！？今のクソゲーでもないぞゴラァ！」

「…はあ！？ちよいとあんた！」

女性は疑問に思うことがあったので、恐怖から立ち直りすぎさま奏に質問するが奏は未だに暴走している。

「てかさ、何、死神が三途の川行くてどうよ？ミイラ取りがマジでミイラになりましたよ」（泣）」

「（！？死神って、…まさか外界の死神かい！？）お兄さん、ちよいと聞きなよ！？」

「ふえ？」

女性が大声で言うとうとうやく気付いたようで変な声を上げながら女性を上目遣い＋涙目で見た。

「っ！？（可愛い！？…じゃない）…あんたは死んじやいないよ。」

「…本当に？」

「ああ、大丈夫だよ（本当に可愛いな、これで男の子だったら卑怯だよ…聞いてみるか？）…ところであんた男の子かい」

「？、そうだけど？」「…」女性はこの時世の中の非情さを知ることになった。それからようやくお互いが落ち着き、話せるようになったのは三十分後だった。「…というわけだ。その、小町さん…何て言うか、すまん」

「あつはっは！別に気にしなくていいよ。後、私のことは小町でいいから」

奏が先程迷惑をかけたことを謝るが赤髪の女性小町は豪快に笑うと奏の肩をバンバンと叩きながら許してきた。奏が小町から聞いた話をまとめてみると、彼女の名は小野塚小町で幻想郷の三途の川の死神らしい。幻想郷とは人と妖怪が共存し（決して仲がいいわけではない）外界とは博霊大結界とやらで隔たれた世界とのこと。

「…なるほど、なら転移は此方の魔法使いによるものか。ところで小町、他の奴等は来ていないんだよね？」

「まあ、来てないね。」

「じゃあランダム式か…無事な事を信じよう」

奏が溜め息をついていると小町が呼んでいることに気付いた。

「何だ？」

「いや、奏も死神なんだろ？あたいも死神だし、外界とは違いがあるのになってさ」

「なるほどな、確かに気になる。じゃあ俺からだな、外界はだな――」

奏は小町の案に同意し死神談義を始めた。

――二時間後――

「でな、俺は言ったんだ。この周辺の被害はあの酔っ払い地縛霊のせいだって、でも上司はお前が早めに対処しなかったから駄目なんだとか言っただぜ！？おかげで給料は減給だよ！」

「うんうん、あんたも苦労してるね。やっぱり死神だってサボりたい時があるんだよ。」

奏の仕事話に小町は頷いて言い、それに奏は激しく同意した。

「それだよ、それ！別に死神だからって体力が無限大にあるわけじゃないのに、働かせすぎなんだよ！まだ人間の労働基準法の方がしつかりしてるだろ？」

「そうだね、上司はもう少し部下を労うことを考えるべきなんだよ。」

――

「…そうなんですか小町？」

「そうそうって、何でいきなり丁寧口調…に？」

奏は途中から第三者に気付いたが小町は気付かずに溜め息を付きながら話していたが明らかに違和感を感じ固まった。

「仕事を放棄している上に私への悪口ですか…小町、覚悟はよろしいですか？」

小町は大量の冷や汗を流しながら壊れたブリキのようにギギギと首

を後ろに振り向かせた。

「…小町、この人誰？」

「えっ、ええっ映姫様っ!？」

「…ええ、私ですが」

小町の後ろに帽子を被った緑髪の映姫と呼ばれた少女は無表情のまま答えて立っていた。

「こっ、これはですね…サボリじゃなくて世間話というか…」

「?、何を言っている小町? 理不尽な上司が苛つくからサボっているだけだろ?」

「ばっ!？」

小町は冷や汗をかきつつも誤魔化そうとしたが呆れたように奏が言ったことで台無しになり、映姫の目が厳しくなる結果となった。「

…小町、そうらしいですが何か弁解は?」

「…ありません(泣)」

「小町いいい!!」

「はぁいいいい!？」

「あなたという死神は毎回毎回」

「(…俺が悪いのか?)」

無表情から一変、激怒した映姫はくどくどと小町に説教を始め小町の顔はすでにげんなりしていた。そんな小町を見て奏は自分の過ちを探していた。

—映姫様の説教、二時間後—

「…これぐらいにしときましょう」

「あり…が…とうござ…います」

小町は映姫に息も絶え絶えな状態で(主に精神的に)礼を言っていた。映姫はそれを見ると小町ともう一人サボっていた死神を探した。するとすぐに目的の人物(?)は見つかったが、映姫は目を見開いて驚くと、ポツリと言った。

「…小町が叱られている間ずっと逃げずに私の説教を聞いていたのですか?」

「おかしいか？」

映姫はもう一人（？）のサボリ死神である奏の言葉に何も言えなかった。彼の行動がおかしいかと問えば、サボった理由はどうであれ逃げずに説教を受けることは間違いではない。

「（だからこそ逆におかしい）…あなた、本当に死神ですか？」

映姫はこの幻想郷の閻魔であり、説教の辛さとはかく有名で残る奴は普通にはいない…それが死神なら尚更である。

「つまり貴方は死神じゃない」

「…あゝ、話すと長くなりますが良いですか？」
「？」

映姫の言葉に奏は困ったように頬をかいて、映姫は首をかしげた。

―死神説明中―

奏から説明を受けた映姫は少し驚いたが納得していた。

「なるほど、貴方は外界の死神だから私を見ても逃げなかったのですね」

「まあ、普通は逃げる理由ないし、俺は上司が気に食わないですから。」

それを聞くと映姫は呆れたような顔をして言った。

「どこの死神も小町みたいにサボるんですか？後、上司の事を悪く言わないように！」

その映姫に奏は若干怒りながら言い、口調も荒くなっていた。

「…はっ、あんな奴等に敬意を払うつもりはないし、…あんたも小町をこき使ってるそうじゃないか？」

「？、…すみません、小町が何を言っていたか教えてくれませんか？」
「…分かった。」

それから奏は映姫に話したが、小町は大抵サボリ魔で映姫を逆に困らせており、また映姫がとても真面目で大変礼儀の出来た人ということが分かった。ということで現在奏は映姫に土下座をして謝っていた。

「…本当にすみませんでした！」

「…いえ、あの…」

かと言う映姫も戸惑っていた。彼の話の上司は映姫からしても人使いの荒さや地縛霊に対する対処が酷いと思ったのだ。

「（それに彼は小町と違ってどちらかというと真面目な方ですね。説教もちゃんと聞いてますし）…奏さんでしたか？」

「はい。何なりと罰を、今回はこちらに非がありますので」

映姫の問いに奏はそう答えると再び深く謝罪をした…そんな姿に映姫は感心すると、少し微笑みながら言った。

「顔を上げてください奏さん」

「あつ、はい」

「貴方は外界の死神ですし、どうやら小町より真面目な方みたいですよ…ただし、やはりこちらにも幻想郷の閻魔として罰を下さなければいけません。それは分かりますね」

「…」

その事に奏は反論はしなかった。映姫の対処には全く問題がないからだ。だから奏は無言で聞いているわけだが、何故映姫が笑みを浮かべているかは分からなかった。

「あの、少し質問しますが…何故笑みを浮かべているんですか？」

「それはですね、貴方の罰は私の下で死神として働いてもらうからですよ。」

「へっ!？」

幻想郷の閻魔の言葉に奏はその時固まるしかなかった。そしてこの日から外界の死神が罰として幻想郷に滞在することになった。

東方死神滞在記二話「やっぱり同じ者同士だと世界が違っても話は通じ合うもん

…テラヤバスw

キャラ崩壊している気がする…てか文がー！誰かおらに文才を分けてくれー！！って叫びたい気分ですね…見ていただきありがとうございます。

誤字などがありましたらお知らせください

東方死神滞在記第三話「…外界の死神全てが良い死神か知りませんが奏さんは

訂正：熱を風邪に訂正しておきました

東方死神滞在記第三話「…外界の死神全てが良い死神かは知りませんが奏さんは

「…ようやく終わりましたね。」

私は半分ほど書類の処理が終わったので思いきり肩を伸ばした。すると目の前にお茶がいきなり置かれたので、驚き慌ててそちらの方向を見ると奏さんがお盆を持って立っていた。

「少し休憩されたらどうですか？」

「…そうですね、ありがとうございます。」

私は奏さんの提案をありがたく受け入れ少し休むことにした。私はお茶を飲みながら彼をちらりと見てみる…彼は自分の机にお盆を置いて既に自分の書類を処理し始めていた。そんな彼を見ながら私は思う。

「（奏さんが幻想郷に来てからもう3日目です。）」

彼は既に幻想郷に慣れてきていた。家の職場の死神との交流は良好だし、もちろん…そう！小町と違って決してサボらない（↑ここがかなり重要です）。それに事務的な処理能力もあるので事務の係もありがたい戦力が入ったと喜んでましたし、こうやってお茶を出すなど気配りも出来ますし礼儀も問題ないです…最初会った時とは大違いですね？全く！前の上司は彼をどんなふうに扱っ—

「…映姫様？」

「ひゃい！？っ！？／／／」

「…大丈夫ですか？」

彼にいきなり話しかけられて噤んじやいました！？彼をじつと見すぎて彼を不審に思ったのでしょうが…うう、まさか噤んでしまうなんて。

「（とりあえず答えないと！）」

私は頬が熱くなるのを感じながら言った。

「だひじょーぶでしゅー…！…っふあ！？／／／（また噤んじやいましたああ！？てか悪化してるじゃないですかー！？／／／）」

私は顔が真っ赤になるのを感じた。正直奏さんの顔を恥ずかしすぎて見ることが出来なかった。すると彼の声が聞こえてきた。

「…映姫様、駄目じゃないですか！風邪ひいてるのに働いちゃー！」
「ふえ！？（えっ、風邪ひいてませんけど！？）」

私はひいてないと言おうとしたが気付いた。次の彼の言葉で確信が持てた。

「風邪なんかひいているから舌の呂律がまわらないんじゃないですか？後の書類は俺がやっておきますから寝ていてください。」

「…」

彼は気付いていないフリをしてくれている…やはり

「（貴方は優しいです）…ありがとうございます」

私は自然と笑んで今度はハッキリと答えていた。

「…どういたしまして。上司が風邪なら心配するのは当たり前ですよ？」

本当は分かっているんでしょうが…

「これからは体調管理に気を付けます。…もう風邪は治りましたから書類を」

「どうぞ」

「…自分から言うのもなんですが普通は先ほどまで風邪をひいていた人に仕事はやらせませんよ？それに風邪の人って舌の呂律がまわらないんですか？」

私がクスリと笑って言うとは彼は苦笑いしながら返してきた

「いえ、急性の風邪のようだったんで…すいません舌の呂律は言葉の誤ということで」彼はそう言うのと再び仕事に戻り始めた。私も置かれたお茶を飲みながら書類を見てるとふと気付いた。「（そろそろ普通ならこの時間帯には疲れていたんですが…）」

私はちらりと彼を見た。…彼を見ると不思議と胸の奥が暖かくなる気がした。

「…奏さん、もう一度言わせていただきます」

—ありがとう—

―映姫 side out―

「？」

映姫のポツリと呟いた言葉がよく聞こえずに奏は一度振り向いたが映姫は笑顔で目を閉じていたのが目に入ると微笑して視線を外した。
「（今度の上司は前の上司より真面目で良い人だ…少しでも負担を減らさないとな）」奏は新たに決意すると目の前の報告書などを素早く処理し始めた。…今日の幻想郷の裁判所は穏やかな空気が流れていた。

東方死神滞在記第三話「…外界の死神全てが良い死神か知りませんが奏さんは

三話ということですが自分の文才の無さに泣いた。

東方死神滞在記第四話「これが現実とは思えない。…けど俺に魔法使いとしての

久しぶりに投稿四話目です。駄文ですがよろしくお願いします

東方死神滞在記第四話「これが現実とは思えない。…けど俺に魔法使いとしての

「…っうゝ？…此処は何処なんだ？」

俺が目覚めすと辺りは森だった。

「…嘘だろ、本当に魔法つてあつたのかよ…」

奏が嘘を言っているとも思わなかったけど正直信じるかと言えば無理だった…。すると俺の視界の中に見知った人物が見えた。

「！、千秋！」

「！？、悠也なの！？」

「やっぱり千秋か！すぐ行くから！」

「分かったわ！」

千秋が俺は急いで森の中を駆けて千秋と合流した。

「良かったよ千秋が無事で」

「私も悠也に早く会えたのは助かったわ…さすがに一人は怖かったもの、…亮と奏はいないのね」

千秋は俺の側にあの二人が見えないと顔を曇らせた。俺も一瞬顔が曇ったがある事に気付き千秋の手を掴んだ。千秋はいきなり掴まれた事に驚き顔を赤くしながら非難してくる。

「ちよ、何するのよ悠也！？離し「静かにしてくれ」！？……………」

千秋が驚きながらも静かにしてくれたのですぐに理由を語る

「簡単に言えば襲われるからだ」

「！、…なるほどさっきの大声ね？」

俺はそれに頷くとすぐに千秋の手を引っ張りその場から離れた。それから小川があるところにつき、俺達はとりあえず休憩をそこですることにした。

「しかし、ここはどこなんだろうな」

「森だし分かんないわ。とりあえず人を探しましょう？」

「そうだ—」

「うわあああああああ！？」

『！？』

千秋の提案に悠也が頷こうとした瞬間男の子の悲鳴が聞こえてきた瞬間二人は固まった。

「…悠也」

「千秋、助けに行くぞ！」

「うん！」

二人は顔を見合わせて頷くと声の方向へと駆け出した。

「っ！？あんな大きな狼見たことないわよ！？」

「大丈夫か！」

「怖いよ」

千秋は普通の狼より二倍ほど体格が大きい狼に驚愕し、俺は泣いている男の子の頭を撫でながら狼に気を配った。

「…千秋、この子を頼む」

その言葉に千秋は驚いていた…当たり前か。

「ちよつと待つて！あれと戦う気なの！？」

「どのみち動かなければ食べられる…なら先手必勝だ！」

「悠也！！」

千秋の悲鳴を背にして俺は巨大狼に駆け出した。巨大狼も俺が向かってくるのに対し迎撃体勢をとる。

「せい！」

俺は攻撃されないように素早く近付くと巨大狼の顎に掌底をくらわせる。それに巨大狼は悲鳴を上げつつも攻撃を繰り返してきたが俺は即座に伏せやサイドステップをしてかわす。そのやり取りをししばらく続けると巨大狼の悲鳴が大きくなってきた。

「（よし、これなら勝てる！）」

俺が勝利を確信し殴ろうと近付いた時だった。巨大狼が咆哮を上げ口から吐き出した青いものが俺の腹を直撃した。「がっ！？」

俺は後ろの木に強く叩きつけられ一瞬息が止まった。

「ごほっ！（何だよ今のは！？）」

俺が血を吐き出しながら先程の不可解な現象について考えていると千秋と男の子が近付いてきた。千秋は涙目で男の子も心配そうに見ていた。

「…逃げろ」

「嫌よ！何馬鹿なこと言っているのよ！？私は悠也を死んでも置いていかないんだからね！…ばかあ」

「おいちも兄ちゃんを置いていけるかよ」

「…ぐっ！？（馬鹿、皆死んだら意味がないだろうが！）」

二人の言葉に激しく焦り激痛がする身体を動かす。俺がうめくと二人は泣き顔で近付いてきたが俺は大丈夫だと手で制し、次に巨大狼に目を戻した瞬間だった。

「きゃああー！！？」

「うわああああー！！？」

目の前には飛びかかってくる巨大狼と悲鳴を上げる二人がいた。

「（畜生！このままじゃ二人が危ないのに…動けよ身体あ！）」

俺は唇を噛み締めながら動けずただ心の中で叫ぶことしか出来なかった瞬間だった。

「あなたは素質があるわ、悠也」

「本当ですか！——さん！？（あれ、何だ…これ？）」

俺の頭の中に変な声が聞こえてくる…それに

「（時が止まつてる？）…こ…こ…は？」

俺が不思議がつっていると会話が再び聞こえてきた。

「凄いわね…まさかここまで魔法の上達が速いなんて」

「えへへ、僕ね…強くなったら——さんを守るほどの男になるんだ」

そつだ、それを言った時はあの人驚いていたんだ。

「！、ふふっ、あなたが私を守るにはもう少し強くないとね」

「…——さん、僕頑張る！」

昔の俺が叫んだ瞬間いきなり場面が変わった。

「どういうこと？何で——さんが帰らなきゃ行けないの！？」

少し大きくなつた昔の俺が女性に叫んでいて、女性はそれに悲しうに目を伏せて言った。

「本当はこんなに長居するつもりはなかった…ごめんね悠也。…あなたはもう私と魔法を忘れて日常に戻りなさい。」

「うっ!？」

そこで目の前が突然真つ暗になり俺は激しい頭痛に襲われた。

「うぐっ、!」

頭痛の痛みに耐えながら前を見ると元の世界?に戻ってきていた。巨大狼が二人に襲いかかろうとしているが俺はおかしなことに気がついた。「(狼の動きが遅く見える…それに)傷が治っている?」先程までは狼の動きがかなり厳しいくらいに見えたのに今は鈍重な動きにしか見えなかった。そしてもう一つは身体全体の傷が治っていることだ。先程の傷や折れていた肋骨の骨が治ってきているのが感じられる。

「(それに…対処方も分かる)風の楯シルフィード」

俺は即座に風の防御魔法を無詠唱で発動させると千秋達の周りに風の層が出来て、飛びかかった巨大狼は逆に切り裂かれて悲鳴を上げる。

「…悠…也?」

「………すげー」

二人は信じられないものでも見るかのように俺を見ていたが、俺は油断をせずに巨大狼に追撃をしかけた。

「…ファイヤーボール」

俺の手のひらから放たれた巨大な火球は一瞬にして巨大狼だけを燃やしつつくした。

「エータ!大丈夫か!？」

「慧音先生!?!大丈夫だよ!」

「…よし、何とかなつた…な」

男の子の言葉に安堵すると俺の目の前は暗くなった。

東方死神滞在記第四話「これが現実とは思えない。…けど俺に魔法使いとしての

今回は悠也が主役です。あくまで奏がメインなのは変わりませんが
…一応魔法ネタとして悠也の活躍を出してみました…これからも応援をよろしくお願いしますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197k/>

東方死神滞在記

2010年10月13日20時55分発行